

アンダンテ      〽歩くような速さで

山田裕幸      作

【登場人物】

日向井とおる

木の実わかば

舞台上にあるのは、何やら変わった形の箱である。

日向井（ひむかい）と木の実（きのみ）が、工具箱を持って箱を見つめている。

木の実      ……緊張してきました。

日向井      そりやそうだ。何度やっても慣れることなんてことは絶対にない。逆に慣れの方が怖い。

木の実      そうですね。

日向井      きつとうまくいく。

木の実      だといいんですけど。

日向井      うまくいかなければ困る。俺たちだけじゃない。大勢の人が困る。

木の実      ですね。

日向井      焦らなくていいんだ。わかったな。

木の実      はい。

しばし間。

日向井      ところでトイレ、大丈夫か。

木の实 は？  
日向井 トイレだよ。  
木の实 大丈夫です。  
日向井 腹は？  
木の实 減ってません。  
日向井 完璧じゃないか。  
木の实 一応、それなりの準備はしてきましたから。  
日向井 そうか。  
木の实 はい。  
日向井 ついでに聞くけど、君さ、  
木の实 木の实です。  
日向井 木の实くんはさ、好きな食べ物なに？  
木の实 え？  
日向井 好きな食べ物だよ。  
木の实 それって、今、必要な質問ですか。  
日向井 いいから答えてよ。  
木の实 え？そうだな・・・餃子、とか、好きですけど。  
日向井 俺も好きだよ。餃子。  
木の实 いったい、何なんですか。  
日向井 タレの配分は？醤油、ラー油、酢。  
木の实 タレ？  
日向井 俺はね、酢8、ラー油2、醤油0。  
木の实 なんか意味あるんですか。  
日向井 意味があるかって・・・？だって何か喋ってない  
と、持たないだろ、間が。  
木の实 別に空いたっていいじゃないですか、間。  
日向井 そういうわけにはいかないよ。  
木の实 どうして。  
日向井 だって間が空くと怖いだろ。  
木の实 怖い？

日向井 君は怖くない？

木の実 どうでしょう。

日向井 で、どうなんだ、配分は。

木の実 醤油2、酢2、ラー油1、

日向井 まだ5だぞ。

木の実 醤油、酢、ラー油以外でもいいですか。

日向井 もちろんだ。

木の実 マヨネーズ5。

日向井 まじか。

木の実 すみません。

日向井 いいんだ。謝ることはない。俺も好きだから、マ

ヨネーズ。

木の実 よかったです。

日向井 でも、餃子にはつけないけどな。

木の実 昔、付き合ってた彼女にドン引きされましたよ。

日向井 そりゃつらかったな。

**二人の前にある箱は微動だにしない。**

日向井 マヨネーズくらいでなんだ。俺たちはな、選ばれ

し者なんだ。この仕事は、誰だってできるわけじ

やないんだ。

木の実 日向井さんもないですか。ドキドキしたことつて

心臓がとび出るような。

日向井 ないな。第一、どういう感覚なのかわからないか

らな。心臓がドキドキするって感覚が。

木の実 本当にドキドキするみたいですよ。うちのなんか

に聞くと。どっくん、どっくん、どっくん、って

心臓がいうんですって、緊張したりすると。

日向井 なんかさっきの「うちのなんか」って感じ、すげ

「自然だったな。ほら、奥さんを呼ぶときの「うちのなんか」ってやつ。会話に実にスムーズに挿入されていたっていうか。」

木の実　　そうですか。

日向井　君くらいの年齢で、そんなに自然に話せると、楽だろ。色々。

木の実　　あんまり楽って思ったことないですけど。日向井さんは？奥さんのこと。何て呼ぶんですか。

日向　　今、ひとりだから。

木の実　　あ、そうなんだ。

日向井　　何でタメ語？

木の実　　ごめんなさい。

日向井　　いいんだけど。

電話がかかってくる。

日向井　　もしもし。あはい。わかりました。はい。じゃ、始めますので。わかりました。ええ、大丈夫です。任せてください。はい。

電話を切る。

日向井　　住民避難、終わったそうだ。

木の実　　そうですか。

日向井　　始めようか。

木の実　　わかりました。

木の実、ヘルメットをかぶって、箱に近づいていく。

木の実、ドライバーを一本取り出し、しゃがみこむ。

日向井、その様子を黙って見守る。

木の实 何か喋ってください。

日向井 何で？

木の实 間が怖いです。

日向井 な？言っただろ？

木の实 よくわかりました。

日向井 なあに、いいんだよ。君、初めてだしな。えっと

木の实 木の実です。

日向井 木の実君、俺に任せろ。間は俺が埋めてやる。木の实くんは、手先にだけ集中しろよ。

木の实 わかりました。間は任せます。(腕時計を見て)

日向井 午前10時32分、作業を開始する！

木の实 いきます！

日向井 大丈夫だからなー慎重になー急ぐ必要ないからなわかってます。

日向井 ゆーつくり、ゆーつくりー

木の实 はい。

日向井 餃子のタレはー、

木の实 ・・・

日向井 醤油3ー、ラー油2ー、マヨネーズ5ー、あ、醤油じゃなくて酢だっけ・・・おい、どうだっけ？  
醤油だっけ？酢だっけ？マヨネーズは5だよな。  
彼女にドン引きされた。

木の实 ちよつと黙っててもらえませんか。

日向井 だっってお前、何か喋っていてくれって。

木の实 やっぱり、黙ってください。

日向井 わ、わかったよ。じゃあ、埋めないぞ、間。いいんだな。

木の实 大丈夫です。ひとりで乗り越えてみます。

木の実、集中して、ねじを一本一本、外していき、そろそろと蓋をあけた。

日向井 どうだ？なんか見えるか。

木の実 見たことのない感じです。

日向井 どういうこと。

木の実 だから、これまで研修も含め、一回も見たことないタイプです。

日向井 本当に？どれどれ。

日向井、じりじりと、箱に近づいていく。

日向井 本当だなあ。確かに見たことないタイプだな。

木の実 あ、ヘルメット、かぶってくださいよ。近づくなら。

日向井 いいんだよあんなもの。なんかあったら同じだよあってもなくても。

木の実 でも、規則ですから。

日向井 へー意外だねえ。そういうとこ、気にするんだ。

木の実 だって、なんていうか、こういう現場では、そういう気の緩みみたいなものが、ミスにつながるじゃないですか。

日向井 わかった、わかったよ。確かに言う通りだよ。コノミくん。

木の実 木の実です。わざとでしょ。

日向井 違うよ、パンノミミくん。

木の実 いいですよ、もう。

日向井 へへへ・・・少しは間が埋まったかな？

日向井、ヘルメットをかぶって、箱に近づく。

木の実、日向井、二人で箱を覗いて、

日向井　そことき、そこの端っこ、触ってみ？

木の実　ここですか。

日向井　そう、その、端っこ。

木の実　（手を箱の奥につっこむ）

日向井　（おどけて、木の実の耳元で）バーン！（と脅かす）

木の実　わあ、びっくりしたー

日向井　へへ。

木の実　ちよっと、やめてくださいよ。

日向井　（すぐに木の実の手首で脈拍を計測する）

木の実　何ですか。

日向井　マニユアルでな。

木の実　脈拍ですか。

日向井　喋るなって。

木の実　はい。

日向井　（しばらく測定して）大丈夫だ。規定の範囲内だ。続けてくれ。

木の実　あるんですか、そういうマニユアルが。

日向井　一応、君、新人だからな、あるんだ。指導員として。

木の実　ほら、これ見てください。ね？こんなの見たことないですよね。

日向井　そうだなあ。何だろうな。

木の実　何でしょう。

日向井　ちよっといいか。

木の実　はい。（と、箱の前からどく）

日向井、箱を携帯で撮影して、本部に送信する。

日向井 今、画像送ったから、本部に。

木の実 普通ですね。

日向井 だって、これが一番簡単だろ？

木の実 まあ、そうですね。

日向井 ピッチャーやったことある？野球の。

木の実 ありません。

日向井 そっか。

木の実 え？終わりですか。

日向井 あ、いやね、俺、草野球でピッチャーやってるんだけど、マウンドの上ってさ、本当に静かなんだよね。自分の呼吸しか聞こえないっていうか。ベンチとかいろいろ盛り上がって声出したりしても、マウンドの上では孤独っていうかさ。

木の実 へー。

日向井 つまりね、世間から見るとタイソウなことだって実際に関わっている人間からすれば、実に孤独だっということが言いたいわけだ。

木の実 まあ、そうかもですね。

日向井 変なところ触って爆発してもなんだから、少し待つか。

木の実 はい。

日向井 そうしよ。

日向井、ヘルメットを脱いで、座る。

木の実、爆弾をじろじろ見ている。

日向井 (パイプを取り出し) 離れてろ。危険だから。

木の実 休憩ですか。

日向井 そだよ。最近禁煙したんだ。値上がりしたしね。

木の实 いや、そういう問題じゃなくなつて、リラックスしすぎじゃあないですかね。

日向井 俺たち知らないうちに物凄いプレッシャーかかってんだぞ。ただ心拍が上がらないだけで。休まないで、じきにつらくなるぞ。本部から返信がくるまで、休んどけ。

木の实 そうですか。

日向井 冷酒と一緒にだ。後になつて利く。

**木の实、箱から離れて座り、ヘルメットを取る。**

日向井 これ、食べるか。

木の实 何ですか。

日向井 キャラメルだよ、

木の实 あ、いただきます。

日向井 ちよつと、とけちやつてるけど。

木の实 ほんとうだ。

日向井 まあ、味に問題はないからさ。

木の实 いただきます。(食べて) うまい。

日向井 うまいだろ。

木の实 ええ、うまいです。

日向井 (パイポをひと吸い) ふー。

木の实 奥さん何て言ったんですか。別れるとき。

日向井 ん？

木の实 休憩中だし、いいかなつて。訊いても。

日向井 俺な、現場決まると、いつも部屋の掃除してから出勤するんだ。隅々まで雑巾がけして。それがすごく嫌だつて言つてな。何であなたが、そんなことしなくちゃならないんだつて。いくら説明して

も駄目だった。誰かがやらなくちゃいけない仕事  
なんだけどね。何で志願したんだ。あるだろ理由  
が。何だ。  
木の实 人の役に立ちたいからですかね。  
日向井 人の役に立つか。それが本当にできたら、生きて  
きた意味があるってものだ。

しばし間。

木の实 しかし、静かですね。  
日向井 半径3キロ以内の住民、全員避難だからな。ひと  
っこ、ひとりいないとは、こういうことだ。  
木の实 ええ。

日向井 何度、現場に来ても、この静寂だけは慣れない。  
ほら、人はいないけど、生活は残ってるだろ。た  
だ人だけがない。まだスープからは湯気が立っ  
ている。人だけがない町っていうのは、なんだ  
か不気味だ。

木の实 何て呼べばいいんでしょうか。  
日向井 呼び名？どうだろうな。これさえ処理できたら、  
すぐに日常にもどるんだし。いらないよ呼び名な  
んか。パイの実くん。

木の实 ・ ・ ・

日向井 でも珍しい苗字だよな。

木の实 そうみたいですね。

日向井 少なくとも、俺は初めて会った。

木の实 ウチ、もうすぐ子供産まれるんですよ。今、36  
週で。

日向井 もうすぐじゃないか。

木の实 ええ、そうなんですよ。

日向井 よかったなあ。あ、もうひとつ食べる？キャラメル。お祝い。ちよつと、とけちやつてるけど。  
木の実 ありがとうございます。

**木の実、キャラメルを食べる。**

木の実 でも不安も一杯ですよ。これから。大丈夫かな、本当に。

日向井 大丈夫だよ。放っておいても子は育つ。

木の実 日本が、ですよ。この国が大丈夫かなって。これから。

日向井 若いのに。しっかりしてるな。自分のことじゃなくて、日本のことまで考えているだなんて、なかなかだな。格好いいぞ。

**そこに、電話の着信がある。**

**日向井、出る。**

日向井 はい、え？本当ですか。わかりました。じゃあ、そうします。いえ、大丈夫です。はい、では。

**日向井、電話を切る。**

木の実 何ですって？

日向井 あのかな、これ、核爆弾の可能性があるそうだ。

木の実 核爆弾？ですか。

日向井 ああ、広島と長崎に落ちたやつその他に、どさくさに紛れてアメリカが落としたものの可能性があるそうさ。だから作業は中止だそうさ。もう一度、段取り話し合って、処理にあたると。

木の实 住民はどうするんですか。

日向井 そりゃ核爆弾ってことは、引き続き立ち入りが制限されるだろうな。

木の实 いつまで。

日向井 さあ、一週間？一カ月？

木の实 やっちゃいましたようよ。今。僕たちで。

日向井 ダメに決まってるだろ。第一、やるんだったら住民の避難区域を3倍、いや10倍にしなけりやならない。

木の实 処理できれば問題ないでしょ。

日向井 そういう問題じゃなくてさ。万が一、爆発してみろ。いったい、どうなると思うんだ。

木の实 そうですけど。

日向井 トップシークレットだからな。誰にも言うなよ。

木の实 トップシークレットって、こういう軽い感じなんですか。

日向井 電話でそう言われたから、そのまま言ってみただけだ。何か、残念そうだな。

木の实 俺、「わかば」って言うんですよ、下の名前。

日向井 俺は「とおる」

木の实 名前って、変わらないじゃないですか。一度決まると。だから俺、一生、「わかば」なわけじゃないですか。

日向井 そうだなあ。

木の实 それがすごく嫌で。

日向井 それを今俺にここで言われてもな。

木の实 言わせてくださよ。僕のわかばマーク、どうしてくれるんだって。

日向井 は？

木の実、初心者マークを取り出して箱にくっつける。

木の実　せっかくなんで、ここに付けておきます。

日向井　ダメじゃないか、余計なものを現場に持ち込んだら。

木の実　わかってますけど名前が「わかば」なんで、今日ほどふさわしい日はないかなって思っつて。

日向井　でもさ、今日は「カウント外」だから、次の機会を待てばいいじゃないか。だから引き上げよう。忘れ物ないようにな

木の実　わかりました。

日向井　あとそれ、わかばマーク、忘れないようにな。

木の実　駄目ですか、このままじゃ。

日向井　わかばマークのついた核爆弾はまずいだろ。第一トップシューレットだぞ。

木の実　了解です。

木の実、わかばマークを外す。

途端に爆弾のスイッチが入り、カウントダウンの電子音が鳴り響く。

木の実　あれ？

日向井　何だ。

木の実　カウントダウンが始まりました。

**起爆装置が発動し、カウントダウンが始まる。**

日向井　カウントダウンだな。

木の実　あと、20分ですね。

日向井　どうするか。

木の実　どうしましょう。

日向井 とりあえず、助け呼ぶか。「おーい」「おーい」  
(と大声を出す)

木の実 住民、全員、避難してます！

日向井 そうだったな。

木の実 電話したらどうですか。本部に。

日向井 ああ、そうか。そうだな。

木の実 どうしたんですか日向井さんらしくない。

日向井 いや、少し動揺してしまったようだ。

木の実 そうですか。

日向井 顔に出ないタイプなんでな。ありがとう。電話してみるよ。

日向井、電話する。

木の実、ヘルメットをして爆弾に近づき恐る恐る触ったりしている。

日向井、会話をして電話を切る。

日向井 どうにかしろってよ。

木の実 どういう意味ですか。

日向井 だから、ここでもうにかしろって。さらに広範囲の住民を避難させる時間もないし、結局、頼るのは君たちだけだからって。

木の実 そんな、だって、核爆弾でしょ。

日向井 そうなんだけど、それが俺たちの仕事だから。最後の砦っていうの？

木の実 最後の砦はいいんですけど、でも爆発したら、大変なことになりますよ。核爆弾ですよ。黒い雨が降るんですよ。

日向井 そもそも、何で起動したんだっけ。

木の実 ええっと、

日向井 ああ！わかばマークだ。君が勝手にわかばマーク

取ったりしたから、起動したんだろう。

木の実 僕のせいですか？起動したの。

日向井 そうだよ、お前だよ、お前せいだよ。

木の実 そんな。だってわかばマーク取れていったの、

日向井さんですよ。

日向井 だって最初に貼ったのはキビダンゴくんだろう。

木の実 そんなあ。

日向井 キビダンゴ君がこの国に3つめの核爆弾をもたら

すのなあ。

木の実 あと15分になりました。何とかしないと。キビ

ダンゴとか言っている場合じゃありません。

日向井 もしかして、怒ってる？

木の実 怒ってなんかいません。とにかく、起爆装置を解

除しましょう。最後の砦なんですよ、我々が。

日向井 そうだな。やるだけやるか。しかし本部の連中、

あっさりしてんなあ。

木の実 実際に起こってみないと、わからないんですよ。

事の重大性が、わからないんですよ。

**木の実、道具箱から、道具を取り出す。**

**日向井、しゃがみこんで、箱の中をのぞく。**

日向井 どいて。

木の実 日向井さん、やるんですか。

日向井 そりゃそうだろう、こういう場合、俺の方が経験あ

るわけだし、

木の実 ヘルメット、かぶりましょうよ。

日向井 わかったよ。(ヘルメットをかぶり) あ、お前逃

げろ。

木の実 え？

日向井 子ども産まれるんだろ。いいから、早く逃げろ。

木の実 そんなわけにはいきませんよ。

日向井 俺だって核爆弾は初めて処理するんだ。しかもカウントダウン中だ。失敗して爆発してもおかしくない。きつと政治家たちは、もう避難を開始しているはずだ。

木の実 本当に？すげー静かですよ。

日向井 だって、避難がばれたら、パニックになるだろ。

偉い人ほど逃げ足が速いんだよ。

木の実 そんな。

日向井 だから早く逃げろ。

木の実 爆発したら少しくらい離れていたって一緒ですよ。どうせあと10分しかありませんし。

日向井 10分あれば7キロくらいは離れられるだろう。車まで走って、ぶつとばせば。

木の実 核だったら、7キロ離れたところで一緒です。

日向井 一緒じゃない。

木の実 残りますよ。

日向井 いいのか、本当に。

木の実 手伝わせてください。

日向井 こういうとき、普通の人は、心臓がドキドキするんだろ。うな。

木の実 ああ、そうか。

日向井 どう？ドキドキしてる。

木の実 全然、してません。

日向井 そうか。あ、キャラメル、食べるか。

木の実 急ぎましょう。

日向井 おお、そうだったな。

日向井、爆弾の処理にあたる。

それをじっと見ている木の实。

木の实 どうですか。

日向井 うーん、どうだろうな。

木の实 大丈夫ですか。

日向井 うーん。分からないなあ。起爆装置、どこかな。  
えーつと。

心臓は平静を装っているが、汗は流れてくる。

日向井、かぶっていたヘルメットをたまらず取って、汗をタオルで拭う。

日向井 こんな何の役にもたたないよ！邪魔なだけで。

（ヘルメットを木の実に渡す）もういいだろ、形は。

木の实 僕がかぶりますが、一応。

日向井 どうぞどうぞ。

木の实 何か、手伝いましょうか。

日向井 そうだな、じゃあ、何か、歌でも歌ってもらおうか。

木の实 歌ですか。

日向井 何でもいいから。

木の实 わかりました。

木の实、場違いな歌謡曲を歌う。

日向井、その間、爆弾の処理にあたる。

木の实、歌い終えて、

木の实 あと、7分です。

日向井 ああ、

木の实 どうでしょう。

日向井 難しいかも。7分じゃ。

木の实 爆発しますかね7分後に。

日向井 必ず、する。

木の实 だけどずいぶん前のものですよね。たぶんダメになつてますよ、起爆装置とか。だって、今までありません？不発弾爆発のニュースとか。

日向井 今までなかったから、今回も大丈夫だ、という考え方は非常によくないぞ、モモタロウくん。このカウントダウンはなんだ。今も動いているのはなぜだ。それは爆発するからだ。

木の实 必ず？

日向井 0になったらお終いなんだよ。その前にとめなくちゃダメなんだ。俺たちが。（パイポを取り出し、吸い込む）

木の实 休憩ですか？

日向井 ああ、ちよつとな。疲れたよ。

木の实 （日向井に代わって爆弾の処理にあたる）

日向井 （その姿をみながら）キビダンゴ持ってたのは、桃太郎でよかったんだよな。（と桃太郎の歌を歌う）

木の实 （無視して作業）

日向井 いいのか。本当に。逃げていいんだぞ。

木の实 ええと、この線がここに通じてるから、ここ切りますよ。

日向井 おお。

日向井、冷静である。

木の实、ペンチを出してコードをるがカウントダウンは止まらない。

木の实 ダメだ、止まらない。もう、こんなものかぶって  
たら、作業がしにくいわ！

木の实、ヘルメットを投げる。

日向井、その姿を見て、再び歌を歌い始める。

容赦なく進むカウントダウン。

木の实 ちよつと静かにしてもらえませんか！

同時に、カウントダウン、止まる。

木の实 止まった。止まりましたよ！カウントダウン。

日向井 おお、よかったじゃん。

木の实 やった！止まった、止まった！

日向井 よかったなあ。

木の实 やった！

日向井 でも、何で止まったの。

木の实 さあ、わかりません。

日向井 ちよつと静かにしてもらえませんか！って言  
ったら止まったよ。

やがてふと、静寂が訪れる。

木の实 相変わらず、静かですね。

日向井 そうだな。

木の实 ここに核爆弾があって俺たちが爆発を阻止したな  
んて、誰も想像もしていないでしょうね。

日向井 そりゃ、そうだろう。

木の实 本部、電話しなくて、いいんですか。

日向井 ああ、そうだな、しておくか。

木の实 早く、してくださいよ。

日向井 だけど、もう少しだけ、この静寂を楽しまないか？あと少しだけ。

木の实 いいですよ。

日向井 電話はその後でいいだろ。

しばし間。

木の实、ふとわかばマークを再び箱に張り付ける。

そしてわかばマークを取り外す。

予想通り、カウントダウンの電子音が再び聞こえ始める。

木の实 見てください、あと3分になりましたよ。思い知らせてやりましょうよ。核が爆発したら、どうなるのかって。どれほどの被害がでるのかって。人間がみずから生み出したもので、みずからの世界を破たんさせることのできる可能性について。

日向井 では起こしてみようとお前が？世界を変えてみようかと？

木の实 僕の間わかばマークがこんなところで役に立つとは思いませんでした。

日向井 さあ、叫べ。ちよつと静かにしててもらえませんか！って叫べ。そしたらカウントダウンも止まるだろう。

木の实 一緒にここで未来を見ましょう。日向井さん。

日向井 産まれてくるお前の子どもの未来はどうする。そうだ、まだ名前を決めていないのなら、未来にしたらどうだ。木の实未来、いい名前だと思うがな。一度でいいからドキドキしたいんですよ。心臓が飛び出るくらい。

日向井 あと1分か。

木の实 もう政府の人たちは避難しましたかね？

日向井 そうだな。もうずいぶん遠くへ行っただろう。

木の实 しばらくはここに人が住めなくなりますがね。この土地に。

日向井 だから叫べ。君にしかできないんだ。ちよつと静かにしていてももらえませんか！って叫ぶんだよ。大きな声で叫ぶんだ。

木の实 ところで「人」だけでなく「生活」もなくなった場所は何て呼ぶんでしょうか。

日向井 そりゃ・・・「廃墟」だろ。

カウントダウン。5, 4, 3, 2, 1, 0・・・

しかし二人はまったく動じない。

箱の前に、立ち尽くしている。

日向井 0になったな。

木の实 ええ。

日向井 爆発しないな。

木の实 でしょ？結局、こうなんですよ。爆発なんてしないんです。

**木の实、顔を真っ赤にしてくやしがっている。**

日向井 お前、もう二度と、現場には立つなよ。

木の实 僕のがかばマークはどうするんですか。まだ正しい使い方をしていない。

日向井 もう使うことはないだろう。

木の实 けどまだ爆発はしていないじゃないですか。きつとまたどこかで別の爆発が起きますよ。

日向井 少なくとも一度は君の言葉で爆発は阻止できた。

文字通り最後の砦になったんだ。だから、さあ、次は世界の爆発を止めてくれ。もう一度、叫んでみてはくれないか。ちよつと静かにしていてもえませんか、叫んでみませんか、叫んでみてはくれないか？

日向井、歌を歌う。大きな声で歌う。

木の实、「ちよつと静かにしてもらえませんか」と言うのを我慢する。

しかし、とうとう我慢できずに、

木の实　ちよつと静かにしててもらえませんか！

と、その瞬間、遠くで爆発が起こってしまった。

日向井　見ろ。あそこを。

木の实　え？

日向井　とんでもないことが起こってしまった。ほら、あそこだ。

木の实　（見て）見たこともない爆発だ。どうして？

日向井　また新たな爆発が起こってしまった。

木の实　僕のせいですか。僕が叫んだからですか。

日向井　バカをいうな。そんなことあるわけじゃないか。君の言葉は、カウントダウンを止める。

木の实　ではなぜ。

日向井　想像力が少しだけ足りなかったんだ。不発弾はまだ、俺たちの知らないところに、無数にあったんだよ。

木の实　想像力ですか。

木の实、日向井、遠くの爆発を見ている。

日向井 君の家族はどこにいるんだ。あの爆風の中にか。  
木の実 ここから遠く離れたところにいます。  
日向井 そうか。安心した。これで世界は、少しでも変わるのかな。起こってみたら、少しは何かが変わるのか。  
木の実 どうでしょうか。

日向井、片づけを始める。

木の実 (爆発を見ている)  
日向井 行くか。  
木の実 どこへですか。あの爆風の中へですか。  
日向井 違うよ、家だよ。家に帰るんだよ。  
木の実 ひとりの家に帰って何が楽しいんですか。  
日向井 家っていうのは楽しくなくていいんだ。そういう場所だろ、家っていうのは。だから、まずは帰宅しよう。  
木の実 この核爆弾はどうするんですか、置きっぱなしにするんですか。  
日向井 大丈夫だよ。じきにみんな忘れる。ものすごいスピードで。ここにかけて核爆弾があっただなんて、あの爆発を見た人間は、すぐに忘れる。  
木の実 だけど危険じゃあないですか。  
日向井 もう爆発はしないよ。君のわかばマークのおかげだよ。  
木の実 そうですか。  
日向井 解除だよ、住民避難は解除。ここは大丈夫だ。  
木の実 でも、  
日向井 さあ行くぞ。早くしないと、雨が降るぞ。死の雨

が。現実はいつても驚くべきスピードで進んでいる。我々の想像を遥かに超えてな。取り残されるなよ、木の実わかばくん。君も、君の「うちのなんか」も、生まれてくる子供も、しっかり守ってあげろんだ。現実には追い越される前に、ちよつと静かにしていてもええませんか！と叫ぶんだ。

日向、いなくなる。

木の実、その場に立ち尽くす。

そして遠くの爆発をじっと見ている。

幕。